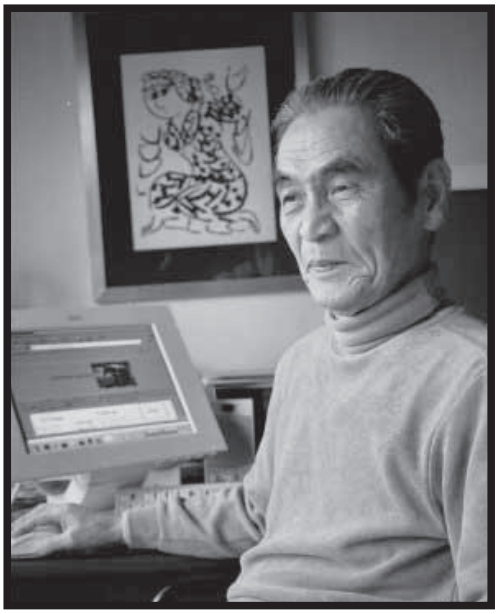
名誉会員　西野博二博士を偲ぶ

弓場 敏嗣

電気通信大学名誉教授

我が国のコンピュータ技術の先駆者である西野博二先生は，原発不明癌から肺炎を併発され，2010年11月23日，薬石効なくご逝去された．享年86歳であった．2010年の正月にいただいた年賀状には，「新しい年を迎え，また新たな心構えでゆったりと過ごしたいと念じております」という文に加えて，「長年続けて参りました賀状ですが，本年で最終回にしたいと思います」と添えられていた．それを読み返したとき，あるいは人生の幕引きをすでにこのとき覚悟されていたのかもしれない，との想いがこみあげてきた．

西野さんは，終戦後まもなくの1947年（昭和22年），大阪大学工学部を卒業後，当時の商工省（通商産業省から，現在は経済産業省に改称）に入省された．同省の電気試験所（電子技術総合研究所と改称し，現在は独立行政法人産業技術総合研究所）は，戦時中，米国で開発が進んだコンピュータの重要性と発展性に着目し，1954年，当時まだ誕生間もないトランジスタ素子を用いたコンピュータの技術開発に着手した．西野さんは，電気試験所の和田弘部長，高橋茂室長のもとで，我が国初のトランジスタ計算機ETL Mark III，ETL Mark IVの開発に携わられた．これらの揺籃期の国産コンピュータ技術は，日立製作所，日本電気，富士通などに技術移転され，その後の我が国のコンピュータ産業の発展に寄与した．ちなみに，上記3名の方々は「情報処理学会」の創立メンバであり，会員番号は和田弘さんが3番，高橋茂さんが14番，西野博二さんが17番となっている．



1962年に管理職になられてからは，通産省工業技術院の大型プロジェクト「超高性能電子計算機」（1966 ～ 1972年）の研究開発に深くかかわられた．IBMに対抗するために通産省が主導したこのプロジェクト（プロジェクトリーダは野田克彦部長）の成功によって，我が国のコンピュータ産業が離陸期を迎えたとの評価を得ている．私が1967年，電気試験所に入所したとき，西野さんは計算機方式研究室長だった．同プロジェクトのもとで，同研究室ではタイムシェアリングシステムの研究開発を担当した．東京タワー前の機械振興会館の中に芝分室が設置され，相磯秀夫さん，渕一博さん，川合英俊さんなどが研究グループを率いた．当時の芝分室における実証的な研究開発の実施によって，鳥居宏次さん，田村浩一郎さん，斎藤信男さん，田中穂積さん，金田悠紀夫さん，古川康一さんなど，ソフトウェア分野の人材が輩出した．その後，西野さんはプロジェクトリーダとして，マルチメディア情報処理の先駆けとされる大型プロジェクト「パターン情報処理システム」（1972 ～ 1980年）の研究開発を実施し，成功裏に終了させた．

西野さんは，大型プロジェクト「パターン情報処理システム」の終了後，電子技術総合研究所を辞め，筑波大学に移られた．1987年に同大学を定年退職後は，八王子市にある東京工科大学に移り，2つの大学で延べ14年間，教育と研究に尽力された．また，情報技術の規格標準化活動にも積極的に関与された．70歳で教授の職を辞されたあとは，悠々自適の生活に入られた．住んでおられた神奈川県相模原市の教養講座で「源氏物語」や「奥の細道」に触れられ，地域の仲間とともに日本の古典文学に関する文化活動を続けられていた．インターネットにも親しまれ，「カタカナ語の長音表記について」と題する論文をウェブに掲載し，歳を得ても失せることのない問題意識の有り様を示されていた．

個人的な思い出を語ることをお許しいただきたい．私の接した西野さんは，常に管理職つまり上司の立場だった．あるとき，西野室長から，「10年後，20年後の将来，君たちがどうなるかは，自分にはすべて分かる」といわれて，驚き，動揺した．自分自身の行く末など，何も見えないあるいは見ようとしない状態で毎日の生活を送っていた身には，「そんなことはあり得ない」と考えるしかなかった．今にして思えば，西野さんは，そのような方法で若い研究者たちに，自分の存在を賭して立ちはだかったのであろう．その言説の迫力は，鮮やかに私の脳裏に息づいている．しかし，その西野さんも，本会誌にご自身の「追悼文」を，まさか私が書くことになるのは想定外であったと思う．まだまだ教えを受けるべき多くのことを抱えられたまま，彼の地へ旅立たれた．深い悲しみの中で，ご恩への感謝をささげ，心からご冥福をお祈りする．

（平成22年12月12日）

御　略　歴

1924 年（大正 13 年）3 月 21 日	広島市生まれ
1947 年　9 月	大阪大学工学部電気工学科卒業
1947 年　9 月	商工省電力局入省後，電気試験所材料部に移籍し，誘電体の理論と測定法の研究に従事
1954 年	同所に創設された電子部回路課に移り，以後計算機の研究開発に従事
1956 年	点接触型トランジスタと光学ガラスの超音波遅延線記憶装置を利用した我が国最初のトランジスタ計算機 ETL Mark III を開発
1957 年	接合型トランジスタと磁気ドラム記憶装置を利用した計算機 ETL Mark IV を開発
1960 年　3 月	ダルムシュタット工科大学から学位取得（工学博士）
1960 年	入出力専用計算機 ETL Mark IVB を開発
1961 年〜 1966 年	大型電子計算機 ETL Mark VI を開発
1966 年〜 1972 年	大型プロジェクト「超高性能電子計算機」の研究開発に従事
1972 年〜 1980 年	大型プロジェクト「パターン情報処理システム」の研究開発に従事
1980 年〜 1987 年	筑波大学電子・情報工学系教授
1987 年〜 1994 年	東京工科大学工学部情報工学科教授
1995 年	東京工科大学名誉教授の称号授与
2010 年 11 月 23 日	逝去（享年 86 歳）

1960 年　3 月	情報処理学会入会
1964 年　5 月〜 1966 年　5 月	情報処理学会理事
1968 年　4 月〜 1970 年　4 月	情報処理学会理事
1970 年〜 1990 年	情報規格調査会技術委員会 SC 1 専門委員会委員長
1973 年〜 1976 年	情報処理学会データ・ベース研究会主査（初代）
1991 年　5 月	情報処理学会平成 2 年度功績賞
1992 年　5 月	情報処理学会名誉会員

受賞・栄誉

1974 年	日本産業技術大賞総理大臣賞を受賞（「高性能電子計算機システムの開発と波及効果」への貢献）
1994 年	勲三等瑞宝章の叙勲